

精神科認定看護師実践報告

精神科認定看護師は全国のさまざまな施設で、質の高い看護実践に取り組んでいます。その現場での実践内容を紹介します。
*なお、倫理的配慮として個人が特定されないよう、事例には改変を加えています。

精神科認定看護師 JOURNAL

ストレングスマッピングと パーソナルリカバリー概念に基づいて

私は2024年に精神科認定看護師となり、急性期病棟で勤務しています。精神科認定看護師教育課程で学んだ「ストレングスマッピング」と「パーソナルリカバリー」概念に基づく看護実践について紹介します。

事例紹介

Aさん(40歳代、男性)は、統合失調症を発症して以降、20年以上治療を続けながら家族と一緒に生活していました。しかし、幻覚や妄想にもとづく行動が原因で近隣のトラブルが発生し、入院となりました。入院後のAさんは、自己肯定感が低く、何事も確認しなければ行動できない状態でした。

ストレングスマッピングシートの活用

Aさんが「グループホームに退院したい」という希望をもち、「人の役に立ちたい」「働きたい」といった社会貢献への意欲を語ってくれました。そこで、Aさんと一緒に話し合い、長期目標を「グループホームに退院して働く」としました。

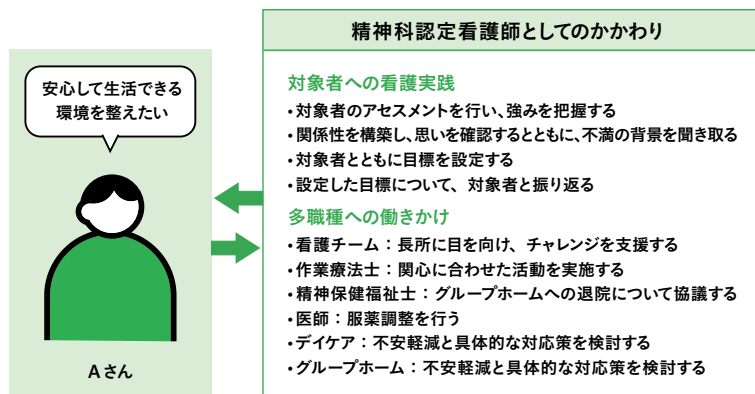
このようにAさんの目標に焦点をあてながら、ともに小さなステップを考えることで、自己肯定感の向上や妄想にとられる時間の軽減をはかることができるようにしたいと考えました。そこで、作業療法で生活技能の獲得や楽しみの場を拡大しつつ、「生活

リズムが整う」ことを短期目標としました。
対象者の思いの確認と情報共有

「パーソナルリカバリー」とは、疾患や障害があっても、その人らしい充実した生活を送ることです。その実現のためには、Aさんの思いや価値観を理解し、言葉や表現を正しくとらえることが重要です。

Aさんは退院準備としてデイケアやグループホームを体験しましたが、その後、くり返し不満を訴えていました。この発言だけを

図 パーソナルリカバリーをめざした支援のプロセス



とらえると「退院したくない」と考えているように思えます。あらためてAさんの言葉の真意をいねいに確認したところ、実際には「退院したいけど、安心して生活できる環境を整えたい」という前向きな思いがあることがわかりました。そこで、Aさんの思いを多職種で共有するためにそれぞれの職種に働きかけを行いました(図参照)。

現在、Aさんはグループホームで生活しながら、やりたいことにも少しずつ取り組んでいます。

精神科認定看護師教育課程で得たもの

この事例では、Aさんの言葉や価値観を正しく理解し、多職種と共有しながらAさんが希望する支援を整えていくことができました。この過程を通して、精神科認定看護師教育課程の学びを体現することができたと感じました。

このように教育課程では多くの学びがありました。もともと大きかったのは精神科看護に情熱をもつ仲間との交流です。オンラインシステムを活用したディスカッションでは、全国各地の仲間と日々意見を交わし、それぞれの課題と向きあいながら、対象者への看護実践を考えることができました。お互いの看護を言語化し承認しあうことで、視野の広がりや新たな気づきを得る貴重な機会となりました。

今後も学びを深めながら、対象者の自己実現に寄り添える看護実践を続けていきたいと思えます。



向井大介
(むかい・だいすけ)
社会医療法人加納岩日下部記念病院
精神科認定看護師(山梨県) (2024年登録)

精神科看護が好きという思いだけではうまくいかない場面が出てきたとき、精神科認定看護師である上司の専門性と、温かく寄り添う姿勢に支えられました。私も誰かを支えたいと思い、精神科認定看護師を志しました。